北区オリジナル紙芝居「かっちゃん はなみず でた」
～制作にあたって～

■紙芝居制作に寄せて

この紙芝居は、包括的性教育（CSE）の考え方をもとに、3～6 歳の子どもたちに「自分の体は自分のもの」と感じることの大切さを伝えるために制作されました。テーマは【境界線と同意】です。

「性教育」と聞くと、性行為や避妊などを思い浮かべる方も多いかもしれませんが、世界ではすでに、性教育＝人権教育という考え方が主流です。この紙芝居は、その第一歩として、幼児期から“からだと心を大切にする感覚”を育むことを目的としています。たとえば、「この人に触られるのは嬉しい」「この触られ方はちょっと嫌だな」という気持ちは、子どもによって異なります。目には見えないけれど、子どもが感じる“心地よさ”や“いやだな”という感覚そのものが、その子の境界線です。

この紙芝居では、「境界線」を感じとり、「同意」が大切であることに気づく最初のきっかけになることを目指しています。

■大人の関わりが、子どもの人権感覚を育てる

子どもには、生まれながらにして「自分の体に何をしていいか、してほしくないかを、自分で決めていい」という「からだの自己決定権」があります。これは、子どもの権利そのものです。私たち大人は、ときに“良かれと思って”お世話をしたり、“早く終わらせたい”という気持ちで先回りしてしまったりすることがあります。また、現場によっては、子ども一人ひとりの声よりも、「園のルール」や「全体の流れ」を優先せざるをえない状況もあります。しかし、どんなに年齢が小さな子どもにも人権があります。

この紙芝居では、主人公・かっちゃんが「鼻水をふかれる」という日常の中で、「 勝手にふかれて嫌な気持ちになる場面」「返事を待たずにふかれてモヤっとする場面」「ふいてもいい？と聞かれ、自分の意思でうんと答えられた場面」の３つの場面を通して、自分のからだに関わるときには、「まず聞く」「返事を待つ」「同意を得る」という関わり方が大切であることを伝えます。

・「いや」と感じる気持ちにフタをしないこと
・「触れていい？」と確認してもらう経験があること
・自分の気持ちを聞いてもらえた体験を積み重ねること

これらの経験を通じて、子どもたちは「自分は大切にされる存在なんだ」「イヤなときは“いや”と言っていいんだ」「友だちの体も、気持ちも大事にしよう」と、自然に人権感覚と他者への思いやりを育んでいきます。

■この積み重ねが、将来にどうつながるのか

子ども時代に「体を大切にされる」「いやと言っていい」「相手の気持ちも尊重する」という経験を積み重ねることは、思春期・青年期、そして大人になったときの“性”や“人間関係”のあり方を大きく左右します。

境界線を尊重されて育った子どもは、自分の気持ちに正直でいられることや、「嫌なときは断っていい」「納得できるまで保留にしていい」という姿勢を持てるようになります。これは、思春期以降の性的な場面において、無理に同調せず、自分の意思で選び、自分を守れる力＝性の自己決定力に直結します。

また、周りの人の気持ちや、同意を丁寧に確認できる人間関係を築けるようになることは、恋人やパートナーとの関係だけでなく、仕事・友人・家族といったあらゆる対人関係においても、暴力や依存ではなく対等な関係を築く基盤になります。

幼児期から「自分の意思を尊重される経験」「相手の気持ちを尊重する感覚」を育むことこそが、未来の“性暴力をしない・されない”社会づくりの土台となるのです。

■読むときのポイント

・登場人物の性別を特定した話し方をしない
・できごとを「良い」「悪い」で判断しない
・登場人物の気持ちを一緒に考えるように促す
・正解を求めず、子ども一人ひとりの受けとめを尊重する
・「これが大事なんだよ」と押しつけず、気づきにつなげる語り方を心がける
・子どもが感じたことを安心して話せるように、あいづちやうなずき、表情で応える
・「イヤって言っていいん」「どんなふうに感じた？」など、気持ちに寄り添う問いかけが大切
・たとえ答えが返ってこなくても、“考える時間”を尊重することで、子ども自身が自分の感覚に気づくきっかけにする。
・子どもの声を評価する様な返し方をしない

■場面ごとの避けたい表現と対応例

1）かっちゃんの髪の毛ボサボサ、お腹いたいの？など、紙芝居の目的に合致しない反応があった時
　×「それは関係ないです。」「そんなことは誰も聞いていません。」「そんなこと言いません」
　○「なるほど、そうだね」「お腹押さえてるね」など、そのまま返してみる。
2）勝手に鼻を拭かれた場面
　×「かっちゃん、ちゃんとイヤって言わないといけないよね。」「こういうときは“ふいてください”って言うんだよ」
　○「かっちゃん、どんな気持ちだったかな？」
3）フラワーちゃんにいいよと言った場面
　×「いいよって言えてえらかったね！」「かっちゃんは、かしこい子ですね。」
　○「フラワーちゃんが聞いてくれて、どんな気持ちだったか？」
4）「おしまい」の後
　×「面白かったね！」「かっちゃん、最後えらかったなぁ」「みんなはどうする？」「かっちゃんみたいに困らないように、ティッシュはポケットに入れとこうね」と、保育士の感想を先に述べない。
　○　沈黙を恐れず。余韻を大切にする。子どもから表出された思いを待ち、しっかり受け止める。

■紙芝居から広がる日常での展開

・日常でも「していい？」「うん」「いやだな」をやりとりする遊びを取り入れる
・子どもが“自分のからだは自分のもの”と感じられるような関わり方を、保育のあらゆる場面で意識する

この紙芝居は、一度読んで終わりではなく、日々の保育の中でくり返し使える「からだと気持ちを大切にする」きっかけのツールです。

監修：株式会社 PLATICA　代表取締役　渡邉　安衣子（助産師）
株式会社 PLATICA　取　締　役　原田　ゆうこ（保育士）